

## 海外養殖魚研究会報

第47号

発行：海外養殖魚研究会

平成3年7月2日

事務局：〒102 東京都千代田区麹町4-5 第7麹町ビル555号  
(株)国際水産技術開発内 TEL:03-3234-8847  
FAX:03-3239-8695

第47回海外養殖魚研究会が、平成3年7月2日(月)午後5時半から7時半に、(社)海外水産コンサルタント協会会議室にて行われました。

今回は、横川次寛氏に「インドネシアの魚類養殖」、寺井充氏に「イエメンの海産物養殖」について講演をお願いしました。

研究会終了後には、恒例の懇親会が開かれ、8名が歓談しました。

研究会参加者は、下記の通りです。

横川次寛、斎藤悦夫(JICA特別嘱託)、中沢昭夫(海外漁業協力財団)、永井康豊(日本配合飼料)、有賀伊万里(マツイ)、近藤衛(D&Aエンジニアリング)、藤木暢(ニチロ)、佐藤正志(オーバーシーズ・アグロフィシャリーズ・コンサルタント)、木原興平(東京水産大学)、永井顯充、小林茂夫、川村震彌(フリー)、池ノ上宏、大橋元裕、岡田秀之、寺井充、石川淳司、河原省吾(国際水産技術開発)

### インドネシアの魚類養殖

横川次寛 (JICA特別嘱託)

演者は1989年2月から2年間、インドネシア浅海養殖開発プロジェクトのアフターケアプログラムのチームリーダーとしてBojonegara Research Stationで業務を行った。同プロジェクトは1978年から1986年までの8年間、魚類及び貝類を対象に調査研究を行ってきたものであるが、魚類の種苗生産に関する信頼できる科学的データの蓄積は不十分であった。

アフターケアでは、これまでの結果をふまえ、第1年目にアカメ(Lates calcalifer)の大量種苗生産技術の確立に力を注いだ。アカメの自然産卵は雨季の10月~4月頃が中心であるが、研究所でストックされていた5~6年魚はホルモン打注により周年採卵することが可能となった。また、月2回産卵させることもできた。仔稚魚の飼育技術はタイ、マレーシア等で確立されたものと同様で、第1年目に20万尾の種苗を生産できるまでに至った。

第2年目からは、アカマダラハタ(Epinephelus fuscoguttatus)の種苗生産に必要な基礎データの収集を行った。当種はインドネシアで最もポピュラーなハタで、成長も早

く、シンガポール市場で販売可能であるため養殖対象種とされた。1年間の試みで、大量のふ化仔魚を得ることができたが、ほとんどが1週間程で斃死してしまい、200尾余りを飼育したにとどまった。斃死原因は、ふ化仔魚が積極的にワムシを摂餌しないためと推察され、摂餌機会を増やしたり、ワムシを栄養強化させることが良いと思われた。この点に関しては、質疑応答の際に、卵質に問題があるのではないかとの指摘があった。

2年間の業績は、Bull. Pen. Perikanan, 1991の特別号として2冊にまとめられた他、インドネシア語でのアカメ養殖マニュアルや、A Field Guide to Groupers of Southeast Asia, Kohno H. et al, 1991として形となって残った。

以上のアフターケア概要の他、インドネシアの水産業、養殖業の現状について紹介があり、最後にスライド映写を行った。

## 南イエメンの海産物養殖

寺井充（国際水産技術開発）

演者は1989年より3年間、南イエメン（現在イエメン）海産物養殖プロジェクトJICA長期専門家としてアデンに赴任した。途中、湾岸戦争のための待避一時帰国するなど各種逆境の中、モンゴウイカ（*Sepia subaculeata*）、ボラ（*Valamugil seheli*, *Liza macrolepis*）、ヘダイ（*Sparus sarba*）の種苗生産・養成試験を行ってきた。

モンゴウイカは10月頃産卵で沿岸に寄ってくるため、これを漁師に依頼して収集し、親イカとして陸上水槽に収容した。10月中旬頃から自然産卵が始まり、卵は水温24～26度で約3週間でふ化した。初期餌料は、活アミを沿岸で採集してきて給餌した（不足時には養成アルテミア併用）。約1カ月で全長3cm程に成長し、その後はボラ等の小魚、小エビ、シオマネキ等の生き餌を与えた。雑魚の切り身には、なかなか餌付かず、特性の円盤状ペレットも効果は疑問であった。飼育期間を通じ共喰いによる減耗が大きく、残ったモンゴウイカも4～5カ月で産卵を開始し成長が止り、産卵後は斃死するなど養殖上多々の問題が残った。9カ月間で全て斃死したが、体重は40～300gと小型であった。

ボラ類の養成は天然種苗を用いて行った。しかし、アラブ首長国連邦での試験結果同様、両種共に商品サイズにするのに2年以上必要であった。

ヘダイについては、親魚を10～12月にかけて定置網で収集し、直径7mの円形水槽で養成した。これらは1～4月に自然産卵し、種苗生産試験を行うことができた。しかし、湾岸戦争のため試験は中断され、数百尾の稚魚生産にとどまった。

当ステーションの問題点は多々あるが、第一に、しばしば停電する、淡水がほとんどない等インフラストラクチャーが不備であることが上げられる。また、現在の施設がエビ養殖用であるため、魚類養殖用としては使用しにくいことも大きい。

今後、当国で魚類養殖を発展させていく上での問題点としては、網イケス等を設置できる養殖適地がない（季節風が強い）、魚価が安い（ヘダイで250円/kg）などが上げられる。